



平兵衛は
過去を
夢見る6

HIRA-HEISHI WA
KAKO WO YUMEMIRU

丘野優
Yu Okano

クリスティアナ・マルキレギナ・フィニクス

ケルケイロの妹。お転婆で働き者。

モルブス
もの病みのニコ

人ならざる少女。瀕死になったケルケイロの前に現れて契約を交わす。

ロドルフ・デュカス・フィニクス

ケルケイロの父で、フィニクス公爵家の当主。

ケルケイロ・マルキオーニ・フィニクス

公爵家の長男。前世ではジョンの親友で、魔族に殺された。

ローゼンハイム・ナコルル

前世における大英雄の一人で、現在は魔法学院の学院長。
本来は匠種だが、公の場では貴種の姿をとる。

テッド

カレン

ノール

ファレーナ

闇の気配を漂わせた、人ならざる美少女。前世からの因縁でジョンに力を貸す。

トリス

フィー

魔法学院同級生

ジョンの同級生たち。

エレオノーラ・カサルシ

魔法学院に通うカサルシ公爵家令嬢。カレンの親友。

ジョン・セリアス

本作の主人公。勇者が魔王を討伐した直後に死亡、なぜか赤ん坊から人生をやり直すことに。

第1話 厳しい光景

見ているだけで身が震えるほどの数の魔物が、迫ってきていた。

魔法学院の卒業試験を受けるため、俺——ジョン・セリアスは、他の魔法学院生と一緒に、神都エルランに来ていた。

試験はエクビリオン大聖堂の“修行の間”で行われた。部屋に入った者が最も強いと思うものが現れるというその場所で、俺は前世の剣の師ハキム・スルトと戦ったのだ。

そうして何とか試験が終わり、皆のもとに戻ろうとしたとき——それは告げられた。

魔族の襲撃。

信じられないような報せ^{しらせ}だったが、目の前の光景が事実である以上、俺たち魔法学院生も戦わなくてはならない。

なにせ、魔術師というのは魔法を使えるというだけで大きな戦力なのだ。

エルランの神兵と魔法学院生が隊列を組み、その前方に魔法学院の教授陣が等間隔で立つという陣形で、魔物に相対している。

俺もまた、魔法学院でパーティを組んでいるノール、フィー、トリスと並んで、魔物に魔法を打ち込むべく、緊張しながら機を待っていた。

未だ魔物たちは遠く、魔法学院生の魔法が届くほどの距離ではない。

魔物たちが魔法の射程距離内に入ったそのときに一斉に魔法を放ち、奴らの数をできるだけ減らす——それが俺たちがやるべきことだ。

前方に立つ魔法学院の教授たちが手を掲げながら、魔物たちとの距離を測っている。

もう少し。

もう少しで、合図が……

「……今だ、撃てーっ!!」

教授たちの真ん中に陣取っていた魔法学院院长ナコルルがそう叫んで、掲げていた手を魔物たちに向けた。

それを確認した他の教授たちもまた同じように叫び、そして直後、魔法学院生たちの詠唱の音が響き、大量の魔法が魔物たちに向かって放たれる。

巨大で鋭い氷の柱、燃え盛る岩のような大きさの炎の玉、名工の作り上げた剣にも匹敵する刃を持った風の斬撃、それに魔物たちの足下を揺らし転倒させる土の魔法。

他にも様々な魔法が魔物たちに撃ち込まれ、魔物たちは傷を負い、数を減らしていった。

その様子に、魔法を撃った本人である魔法学院生たちも、また、これから魔物たちと直接交戦す

る予定の神兵たちも感嘆の声を上げる。

「結構いけてるんじゃないか？ 俺たち」

「これなら勝てるぞ！」

「もつとだ、もつと魔法を放つんだ！」

そんな風に、土気の高まりを感じさせる言葉が飛び交った。

けれど、その声はすぐに静まっていく。

次々に魔法を放って話している余裕がないからというのももちろんだが、それ以上に大きな理由があった。

魔法によって起こった土煙が晴れると同時に、先ほどまでとほぼ変わらない勢いでこちらに向かってくる魔物たちの姿が見えたのだ。

確かに、魔法学院生たちの魔法は魔物の数を減らしていた。

けれど、全滅させるほどでは当然ない。全体の一角を倒したかどうか、それくらいものだ。

それでもたった一撃、初撃を食らわせただけの成果と考えば大したものである。

だが、魔物たちの全く怯まない威容が、大規模な実戦を経験していない魔法学院生たちの心に恐怖を抱かせないわけがない。

再び上がった魔法学院生たちの声は、先ほどまでとは打って変わり、後ろ向きなものばかりであった。

「だ、大丈夫なのかよ!? これで!」

「本当に勝てるのか!」

「まさかここで死ぬなんてことは……」

これほど多くの魔物との戦いなど魔法学院生の大半が経験していないことを考えれば、彼らが弱気になってしまいうのも仕方ないが、これはあまりよくない流れだ。

「ジョン……」

ノールが不安そうに俺を呼んだ。

別に、ノールもまた他の魔法学院生と同じように怯懦きょうだに呑み込まれかけているというわけではない。

このままだと今後の戦闘に悪影響があるという懸念を示しているだけだ。

他の二人……トリスとフィーも似たような表情をしている。

その気持ちは俺にも理解できたが、おそらく心配無用だろう。

というのも、たった今、陣形の一番前にいた魔法学院の教授陣が動き出したからだ。

魔法学院生の魔法の撃ち込みが一段落したことを確認したからだろう。

さすが、教授たちだけあって、生徒たちの癖をよく理解している。

「三人とも心配するな。今先生たちが行ったぞ」

「……本当だな。しかし、あの人数で何が……」

ノールは一応頷いたが、教授陣は十人もいない。

その人数で数千にも上る魔物の大群に突っ込んでも、死に行くようにしか思えないかもしれない。その感覚は間違いないのだが……

「まあ、見てろよ……」

俺が言うと、ノールも前方に目を向ける。

すると、教授陣の中の一人、元素使いエレメントマスターと呼ばれる老魔術師モラード・ガラクルシアが、まず魔物の軍勢の中へ突っ込んでいった。

「ええ、あんなことして、大丈夫なの!」

トリスが驚きの声を上げたが、直後、モラードが突撃したと思しき地点おぼの周辺から、巨大な炎の竜巻が発生した。

魔法学院生が生み出す同様の魔法の数十から数百倍はある、巨大なものである。それに魔物たちは吹き上げられ、さらに燃やされて次々と灰になっていくのだ。

「……凄すぎ」

呆れたようにそうつぶやいたのは、フィーだ。

俺たち全員、モラードの実技の授業を受けたことがあるのだが、彼の全力を見たことは一度たりともなかったのだと、今になって思い知らされた。それほどに強大な魔法である。

しかもモラードはおそらく、あれを何発も撃てるはずだ。

魔法学院生の放つ魔法など、彼の魔法に比べればものの数にもならない。

驚きはそれだけで終わらなかった。

魔法学院の教授陣の中にもはや見慣れた顔として、学術都市ソステナーのブルバツハ幻想爵がいたわけだが、彼は、すーっと空中を飛んで魔物たちに近づくと、空に手を掲げた。

その直後、彼の頭上にズズズと謎の黒い穴のような空間が出現し、そこから卵形をした巨大な物体が這い^はだしてきたのだ。

と言っても、その大きさは鶏の卵どころではない。

人間を五倍にしたくらい^の巨大さで、しかも非常に醜悪な見た目をしているのだ。

あちこちに裂けた口やら大きな瞳やらが張りつけられており、さらに手足も生えている。

口から垂れる液体は銀色をしていたが、それが地面にこぼれ落ちると煙が上がった。どうやら強力な酸のようだ。

そんな謎の物体が、魔物たちの方に向かって走っていく。

謎の卵形の物体は黒い穴からさらに二体ほど現れて、それぞれ別の方向に突き進んでいった。

パカパカと、ちょうど卵がまっぷたつに割れるような形で最も大きな口を開いて、周囲の魔物を平らげていく。

その様子は、どちらが魔物なのか分からなくなるほど、邪悪で醜悪なものだった。

「……やばすぎないか、あれ。そもそも何の魔法なんだよ？ 召喚魔法？」

見ていたノールが引きつった顔でそうつぶやいた。

少なくとも、既存の魔法体系から外れた何かに見える。

確かに、強いて言うならノールの言う通り、召喚魔法の一種であると理解できなくはない。

しかしそれにしても、喚^よばれた存在は一体何なのか。

低位から中位のものであれば、一般に存在を知られているので何が喚^よばれたのか見れば分かるものだし、反対に高位で秘匿^{ひそ}されるような存在でも、その司^{つかさ}る属性くらいはぱっと見で分かるものだけれど、ブルバツハ幻想爵のそれは今まで見たことのあるどんな召喚獣とも違うし、属性もよく分からない。

禍々^{まが}しすぎる。閻属性のものだと言われても、それ以上の禁呪ではないかと思えるほどの邪悪さだった。

一体あの男はどんな研究をして、あれを喚^よべるようになったのか。

ブルバツハ幻想爵の魔法技術は、俺やナコルルと共に研究をしているせいで他と隔絶しつつある。もしかすると、その中の成果の一つなのかもしれない。

「……まあ、何だかよく分からないが、頼もしいくらいじゃないか」

魔法を放ちつつ、俺はノールにそう返事をした。それくらいしか言えないからだ。

ノールは顔を引きつらせたままである。

「それで終わらせるお前はすごいな……俺はあれが敵だったらと考えただけで震えるよ」

なるほど、それは考えなかった。

確かに、あんな気持ち悪いパカパカした卵形の何かに襲いかかってこられたら、精神的にきついものがある。

「……でも、あの人は敵にはならないさ。たぶんな」

俺はノールにそう答えた。
甚だ真実味に欠ける台詞だったが、前世においてブルバツハ幻想爵はあれでずっと人類の味方だったのだ。

あの見た目や普段の振る舞いを考えると、魔族側につけば有益な研究ができるかもしれない、などと云って寝返りそうな人物に思えるが、そんな気配は全くなかった。

実際、魔導部には少なからずそういう思考をする人がいて、軍部から姿を消してしまう者が稀に現れた。本当に魔族に協力していたかどうかは分からないが。

魔族に与するまでいかずとも、辺境で人を攫って実験体にし、自分の研究にのめり込んでいるという者もいて、彼らは発見され次第即座に粛清されていた。

ブルバツハ幻想爵はまさにそういうことを最もしそうな人物であるが、現実には、最後まで人類の頭脳であり続けた人だ。

危険で非人道的な実験を繰り返してはいたが、それはあくまで人類のためだったのだろう。

そんなことは一度たりとも口にしなかったし、口を開けば実験とその成果の話しか外に出さな

かったが、それでも、彼が人類の未来を考えていてくれたことは分かる。

彼のやっていた実験はすべて、人類が魔族に勝つためのものだったからだ。

そこから外れたことは、一度もなかった。

だから、彼は裏切らない。

たとえ俺の言葉が疑わしくても、それが事実である。

「本当かよ……まあ、ジョンが言うなら信じるけどさ……」

ノールはひどく怪訝そうな表情をしているが、いざれ分かるだろう。

今だって、ブルバツハ幻想爵は魔物たちを蹴散らしているのだ。彼は誤解されやすいが、信用できる人である。

ブルバツハ幻想爵以外に、魔物を倒している教授たちの中で目立っているのはベルノード。

彼女が持っているのは女性らしい武器と言える細剣であるため、他の教授陣と比べて若干、火力で劣るように思える。

しかし、現実とは全く異なる。というのも、その武器を振るう速度が半端ではないのだ。

たった一回突いただけのように見える剣筋なものにもかかわらず、直後には十体以上の魔物が地に伏している。

そうかと思えば、いつの間にかベルノードの姿が消えていて、別の場所でまた細剣を目にも留まらぬ速さで突いていたりするのだ。

まさに美技と称えられるべき剣術であり、ちよつとやさつとの修練ではたどり着けない高みがそこにはあった。

迷宮探索の第一人者という肩書きは伊達ではない。とてつもない実力だ。

モラード、ブルバツハ幻想爵、ベルノアの凄まじい戦いぶり以上に目立っているのが、ナコルルである。

大規模な魔法ばかりを放って戦っている。

それ自体は別にいい。魔法学院長として、納得のいく戦い方である。

けれど、その手には巨大なハルバードが握られており、ナコルルは魔法で怯んだ魔物たちのところに突っ込んで、直接物理的に切り刻んでいるのだ。

貴種姿で嬉しそうな微笑みを浮かべながら軽々とハルバードを振るい続けているものだから、違和感が凄かった。

ナコルルの戦いぶりは、戦闘中のファイと似たものを感じる。

公の場では学院長という立場に相応しくあるため貴種の姿をしているナコルルだが、実際の彼女はファイと同じ匠種だ。匠種というのは好戦的な種族なのだろうか。

前世では、武器を持って接近戦をしているナコルルなど見たことがなかったが、もしかすると自身の名が英雄として広まるにつれてやめたのかも知れない。

“大魔導”の名を持つ者が、ハルバードを振るって戦うというのおおきな話だ。

匠種なのにわざわざ貴種姿に変身するようなイメージ戦略を大事にしている人だ、それくらいのことにするだろう。

ただ、今の彼女の戦いぶりは、魔法学院生や神兵に勇気を与えていた。

貴種でもハルバードで魔族相手にあれほどの戦果を上げられる、ならば、自分たちにも十分に戦えるのではないか、と思わせたのである。

貴種という種族は、魔法的素養はかなり高いものの、腕力の弱い者が多い。

もちろん、長命であるから技術的には相当なレベルに達している者も少なくないのだが、ナコルルの戦いは技術というより、腕力でどうにかしているように見えるのだ。

一振りで自身の周囲の魔物を蹴散らし、間髪容れずに大規模魔法を撃ち込む。その魔法で魔物を吹き飛ばしつつ、怯んだ奴らに向かってハルバードで突っ込む……ということの繰り返し。

倒した数なら魔法で吹き飛ばした魔物のほうが多いのだが、ハルバードでも並みの兵士以上の戦いぶりを見せている。

実際のところ、ナコルルは様々な種族の中でも腕力の高さに定評のある匠種なので、皆の勘違いではあるのだが、この場合は言いつこなし、というやつだろう。

それに、ナコルルは貴種の中でも規格外の腕力に違いはないというくらいは、学院生も神兵も感づいているはずだ。

勘違いであったとしても、勇気を持つきっかけになったのなら、それは悪いことではない。

教授陣の奮闘を見て、この戦いは「とてもじゃないが勝てそうもない戦い」から「頑張れば勝てる戦い」に認識が変わった、というわけである。

第2話 戦いの状況

「さて、教授陣の戦いは見てて惚れ惚れするけど、ずっと鑑賞してるってわけにもいかなそうだな」

俺がつぶやくと、ノールも頷く。

「ああ。そろそろお出ましてわけだ」

ノールが見ている方向に目をやると、教授陣の放つ魔法や攻撃から逃れてこちらに向かってくる魔物たちの姿が見えた。

教授陣が奮闘しているとはいえ、やはり魔物が多すぎる。対処しきれないのは仕方ないことであるし、その逃れてきた魔物を倒すことこそ俺たちの仕事だ。

しかし、それにしても数が多すぎる。

俺たちに魔物の群の中で暴れている教授たちのような力があるなら別だが、そうではない以上、余裕をもって当たれるような数ではなかった。

「斧持って突っ込めばいいのかな？」

楽しそうに言ったフィーに、トリスは呆れた顔をした。

「馬鹿なこと言うんじゃないわよ……そんなことしちゃ駄目でしょう。私たちの役割は、あくまで魔法を放つて敵を倒す。砲台よ。直接戦闘は神兵の人たちに任せるの。さすが、神都エルランを守る神兵だけあって、武術に関しては私たちが足下にも及ばないほど優れた技術を持っているみたいだし」

神兵たちの槍や剣の構え方を見れば、トリスの言うことは正しいと分かる。

俺は前世からの経験で相手の力量をある程度見極めることができるのだが、トリスたちもまた、それなりに魔法学院で武術を鍛え続けてきたのだ。

自分よりも腕が上かどうかは、それが巧妙に隠されたりしていない限り、構えを見れば分かるだろう。

俺の感覚からすると、神兵たちの武術の実力は魔法学院生よりも一段も二段も上である。

もちろん、魔法の使用をありにして一対一で戦えば魔法学院生に軍配が上がるだろうが、純粋な武術に限った場合は神兵たちの圧勝だ。

つまり、魔物たちとの直接戦闘は彼らに任せるのが得策、というわけである。

それはフィーにも分かっていたようで、口を尖らせながら了承した。

「はい……。じゃ、僕たちは魔法をいっぱい使おうか。多量の土よ、起こり、刺し貫け！」

「魔法学院生が土の槍！」

フィーが唱えると同時に、こちらに襲いかかろうとしていた魔物たちに、地面からタケノコのように生えた土の槍が突き刺さる。

といつても貫通力はそこまでではなく、突き刺さっているものもあれば、吹き飛ばすだけに終わったたり、逆に魔物に弾かれてへし折られたりしているものも少なくない。

この辺りに、魔法学院教授陣との実力の差が表れている。

しかし、それでも足止めとしては十分な効果があるし、数体の弱い魔物はしっかりと絶命させることができる。

残りは神兵たちが群がって止めを刺してくれているので、問題ないだろう。

これなら、うまく神兵たちと補い合いながら戦っていけそうだ。

全体から見ると、フィーは機を待ちきれずに少し早く動きすぎたような感じがあった。

しかし、フィーの魔法が確かに魔物たちに効いていること、そしてフィーの打ち漏らした魔物たちを神兵たちが確実に片づけてくれたことが、他の魔法学院生や神兵たちの目に入ったのは良かったといえる。

おかげで魔物を迎え撃つ俺たちの士気は高揚し、フィーに続いて、魔法学院生たちの詠唱の音が次々に戦場に響きだした。

フィーの魔法のような土の槍や、氷の槍、炎の玉や、風の刃などが戦場を飛び交う。

いずれも魔物たちに命中し、その命を確実に刈り取っていく。神兵たちの立ち回りも見事だった。魔法学院生たちの魔法の飛び交う隙間をうまく見つけて走り、魔法で仕留め損ねた魔物たちを見つけては倒していく。

これは口で言うほど簡単なことではない。

なにせ、魔法学院生たちは、これが初の大規模な実戦なのだ。

魔法の飛んでいく方向は基本的にある程度決まっているとはいえ、かなりずれた方向に放たれたり、うまく発動しなかったりすることもある。

そんな不安定な中を走り抜けていくのは、並大抵の勇氣ではできない。神兵たちはかなり修練を積んでいるのだろうと思われた。

また、魔法学院生たちも意外とうまくやっていた。

もちろん、魔法学院生の中には、いくら教授陣や他の学院生たちの奮闘を見たといつても、こんな命のかかった戦いの経験などないため、恐慌や混乱に陥る者も少なからずいる。

それは良くないことではあるが、しかし同時に仕方のないことでもある。

俺だって前世での初陣のときは恐ろしかったし、まともな判断ができていたかどうかすら怪しい。むしろ、今の状況で皆よく戦っているほうだと思う。

しかも、注意して観察してみると、魔法学院生の中には全体を見ながら指揮をしている者もいた。大抵がそれぞれの班のリーダーで普段から慣れているからだろうが、それでも魔物が迫ってきて

いるこの状況下で、混乱することなく冷静に指示を出せているというのは非常に有能な証拠だ。

迷宮で数体の魔物を相手にしている場合であれば、各自に指示を飛ばしやすしい、いざというときにさっさと撤退を宣言すればいい。

けれど、この戦場ではそう簡単にはいかない。一つの判断が全体の生死に直結する恐れがあるからだ。

そんな中で指示を出すというのは言葉以上に難しいものがあり、多大な重圧がかかるのである。

これに耐え、的確な指示を出せる者こそが将たる器を持っているということになるのだろうか、その片鱗を見せつつある者が、学院生の中に何人かいた。

これは喜ばしいことだ。今の戦いでも、そしてこの戦いが終わった後、魔族との戦いが激化していく中でも必要とされる才能なのだから。

有能な指揮官がたくさん生まれることは、より多くの人類が生き残ることを意味する。それは俺にとつて、とても歓迎すべきことだ。

彼らを頼もしく思いつつ、俺もまた前世の経験を活かしてノールたちに指示を出す。

「……ノール、向こうの緑小鬼の集団に魔法を！ フィーはあっちの水妖だ！ トリス！ 隣の班のフォローを！」

残念ながら、魔法学院生の全ての班がうまくやれているわけではなく、周囲のいくつかの班が統制を失いつつあったので、俺が指示を出して立て直させたりもした。

そういうことは、あの時代に何度もやってきたのだ。

どの辺りがまずそうで、どの辺りを補強してやればうまくいくのか、それはぼつと見れば分かった。

こうしたことは経験のなせる業で、魔法学院生たちにはなかなか難しいようだが、それでも学院生の中に未だ死者はいないみたいだ。

神兵たちには徐々に負傷者が増えているが、こればかりはどうしようもない。

直接魔物たちとぶつかって戦う中では、いくら相手の攻撃を避けようとしても完全に避けきれものではない。

神兵たちの中には結構な数の治療術師もいるようであったが、戦いながら治療術をかけ続ける、というのも難しい。

結果として、櫛の歯が欠けるように消耗してしまっている。

今はまだ大した損害でなくとも、いずれ深刻な問題になってきそうな、そんな感じがした。

とはいえ、有効策があるわけではなく、今はできる限り早く敵を全滅させるために、精一杯戦うしかない。

それにしても、と俺は思う。

この時期に、神都エルランにこれほどの規模の魔物の襲撃があるとは、意外にもほどがある。

もちろん、前世においてそんな話など聞いたことがなかった。

もしかしたら、あえて秘匿ひたくされたのかもしれないが、しかしそんなことをする理由が分からない。そうするとやはり、前世では魔物の襲撃はなかったということになるが……ではどうして今回はこのような事態になったのだろうか。

いくつか、理由は思いつかないではなかった。

その中で有力なのは、俺が前世の記憶をもとに今世では色々なことをやったため、魔族の動きが変わってきている、というものだろう。

今のところ、俺は魔族に対して直接大きな働きかけをしたことはないの、魔族が人類の動きを見て何かを考え、今回の襲撃を決めたと推測できる。

……魔族は、人類をどこかで観察しているのだろうか。

そうだとしたら、俺のやっていることは無駄なのかもしれない。

人類がいかに魔族に対抗する準備を整えようとも、それがしつかりと整う前に攻めてこられては、どうしようもない。

前世においては、あまり態勢が整っていない中でも、たくさんものを犠牲にしつつ、何とか魔族に勝利することができた。

けれど、今世においては俺が余計なことをしたために、今のように魔族に先手を打たれ、人類が敗北するという未来もあり得るのではないだろうか。

そんな不安が浮かんできた。

もしそうなってしまったら、俺の行動はすべて逆効果だ。

何もしないほうがよっぽどよかった……ということになってしまう。

それはとても悲しいことだ。

しかし意外にも真実なのかもしれない。

それでも、だ。

仮にそうなってしまおうのだとしても、俺が魔族との戦いへの準備をやめることはない。

なぜかと言えば、もはや歴史は動き出してしまっているからだ。

俺は、国を、人類を強くするために色々なことに着手してしまっている。

ここで準備をやめることは人類を中途半端な状態で放置することにほかならず、結果として、この先にあるかもしれない人類敗北という最悪の未来を、さらに最悪なものへと変えてしまいかねない。

だったら後ろなど振り返らずに、今まで通り邁進まいしんするべきだ。

ひたすらに軍備を整え、魔法理論を構築し、多くの人の協力を求め――

そして、倒すのだ。

魔族を、魔王を。

そのために俺はこの世界に、この時代に戻ってきたのだから。

戦いは今、拮抗きつこうしている。

神兵たちの消耗もそこまで酷くはない。

このまま行けば、間違いなく勝てるだろう。

ただ、それはあくまでこのまま行けば、の話である。

何かの拍子に天秤てんびんが少し傾くだけで、その予想は別の現実へと変わる。

そして、その傾きがやってきた。

最前線である魔物の群の真ん中で、ひたすら大規模魔法や武術による攻撃を繰り返していた魔法学院教授たちの様子が、突然変わったのだ。

遠くからでも見えていた、巨大な竜巻や爆炎が一瞬、止まった。

そして、次の瞬間、巨大な魔法同士のぶつかり合いが見えた。

「……おい、ジョン！　ありや何だ!？」

ノールの叫び声が聞こえた。

トリスやフィーも目を見開いて、ノールと同じ方向を見つめている。

俺も教授たちのいる方角を見たまま答える。

「……教授の誰かの魔法と同規模の魔法が放たれて、対消滅したんだろうな。おそろく……魔人だ!」

「魔人！　あんなにすげえのかよ!？」

王国でたまに確認されていたような低位魔人であれば、あそこまでの魔法は使えないはずだ。

しかし、これほどの魔物の大群を率いてくるような魔人であれば、中位以上である可能性が高い。中位以上の魔人の操る魔法は、人類のトップクラスの魔術師のものに匹敵することもある。

先ほど見たのは、やはり中位以上の魔人の魔法だろう。

あれだけの力を持つ魔人がいるとなると、魔法学院教授でも中々に厳しいものがあると思われる。実際――

「ジョン！　こっちに來る魔物が増えるよっ!？」

フィーが慌てた様子でそう叫んだ。

確かに先ほどまでこちらに抜けてきた魔物の数と、今、群から抜けてきた魔物の数を比べると、倍ほどの差がある。

おそろく魔人とぶつかった魔法学院教授陣に、魔物を倒す余裕がなくなったためだろう。

「このままじゃ、まずいな……」

俺たちの班はまだ何とかなる。俺がいるし、ノールやトリス、フィーは魔法学院生の中でも優秀なほうだ。これまでも十分対処できていたし、魔物の数が倍になっても何とかできると思う。

しかし、他の魔法学院生の班はちよつとまずいかもれない。

火力の問題というより、乱戦になると冷静さが失われて、徐々に押されていってしまう危険性が高いのだ。

魔法学院での迷宮研修においては、多数の魔物を確認したら基本的には逃げるように指導されて

いた。命を無駄にしないためだ。

だから、魔法学院生の多くは、自分のキャパシティの限界に近い魔物との戦闘に慣れていないのである。

この問題を解決するには……

「しっかりと指示できる奴が必要なんだが……」

新たな敵の集団は、目の前に迫っていた。

第3話 公爵令嬢の権威

「ジョン！ お前が行って指示を出してこい！」

ノールがそう叫んだ。

しかし、だからといって即座に「はい、分かりました」と頷くわけにもいかない。

なぜなら、俺たちの班は全体から見ても、かなり危険な位置に配置されているからだ。

陣形からすると、ほぼ真中に当たる。正面から魔物の軍勢とぶつかり合い、そしてどこにも逃げ場がないという位置である。

そんなところで、どうしてあまり被害がないかと言えば、俺たちが今までの学院生活で培っ

てきた技術と仲間との連携を駆使して戦っているからであり、俺がこの場から抜けてしまおうとかなり厳しい状況に陥るだろう。

それは、ノールたちがいくら優秀であっても避けられるものではない。

俺はその懸念をノールに伝えることにした。

「俺が他の班のサポートに向かうと、これまでの連携が崩れる！ いくらノールたちでも、さすがにまずいだろ！」

「けど、このままじゃ全滅しかねないぞ！ 俺でも見れば分かる。左翼の辺りは指示出せる奴がないのか、かなり下がっちゃまってるし、右翼の方だっておかしな突っ込み方してる奴らが見える！ 誰か統制しねえと、最後には俺たちもやばくなるぞ！」

確かにノールの言うことは正しい。

実際に、彼が指摘した通りの状況になっているのが遠目にも見える。

このまま放っておくと、左右から徐々に崩れ始めて、最終的には中央にいる俺たちも危険になるだろう。

魔物が左右同時に進行してきたら、取り囲まれてどうしようもなくなる可能性がある。

そのときは俺だけは逃げようと思えば逃げられるだろうが、そんなことは当然したくない。

しかし、この時代で、ただ一人、未来に起こりうることを経験している俺がここで死んでしまつたら、また前世と同じ悲劇が繰り返されることになる。

それも、もちろん許容などできない。
逡巡しゅんじゆんしたのちに、俺はノールに言う。

「だが……俺が抜けて持ちこたえられないのか!? 今でも十分きついんだ。これから襲ってくる魔物の数が倍になったら……!」

教授たちの猛攻の隙間を抜けて来ている魔物は、およそ倍になっている。

猶予はほとんどなく、もうじき魔物たちはここまでやってくるだろう。

そのことを考えての台詞せりふだった。

「何か考えがあるんなら、今すぐ行け! ある程度なら、俺たちが抑えてみせる! だから……!」

驚いたことに、そう返答したのはノールたちではなく、神兵たちであった。

魔法を放ち続けている俺たちも辛いことには辛い、それ以上に、直接魔物と切り結んでいる彼らのほうがしんどいはずである。

しかしそんな状況で俺たちの話を聞き、行けと言ってくれたのだ。

非常にありがたく、胸をつくものがあつた。

だからこそ、俺は決断できた。

「……頼みます! ノール、トリス、フィー! 三人も頼んだぞ!」

その言葉に、全員が頷く。

「行ってこい!」

そのノールの叫び声を聞いて、地面を蹴る。

俺は振り返ることもせず、ひたすら走る。

できる限り早く、ここに戻ってこなければ——!



「ジョン!? なんでここに……!」

魔物に押されて陣形が崩れている班に近づくと同時に、そんな台詞せりふを言われた。

しかし、いちいち説明している暇はない。

「ここは少し前に出過ぎだ! もう少し後退したほうが楽になる。班長、周りを見ろ!」

そんな風に怒鳴りながら、俺は指示を出して回っていた。

大声で叫んでいるためかなりきつく聞こえているはずだし、そもそも自分の班を離れて勝手に他の班に指示を出しているのだから、客観的に見て気分のいいものではないだろう。

けれど意外なことにそこまでの反感はなく、ほとんどが「分かった! 後退だ! 神兵の方々も!」というように、素直に指示に従ってくれた。

それは俺の顔を見たおかげで恐慌に陥りつつあった頭が冷静さを取り戻し、普段の力を発揮できるようになったからかもしれない。

もともと、魔法学院生はよく学んできた。

集団的な戦闘についても、実戦は経験していなくとも、知識はあるのだ。周りをしっかりと見られる心持ちになれば、十分に対抗できる。

ただ、当然のことながら、全員が俺の指示に従ってくれるわけではない。

特に、もともと俺とはあまり仲が良くなかった貴族連中の中には、強く反発する者も少なくなかった。

ただの平民でしかない俺の指示に従うというのは、彼らにとって屈辱くつじやくなのだろう。

それに、俺は学院生活ですつと成績トップを取り続けてきた。

おおよそ、「貴族」というのは自分が上位でなければ気がすまない人種で、どんな分野であっても自分の上に立つ人間には腹立たしさを覚えるようである。そのことを、学院生活で改めて思い知らされた。

前世、そして今世でも親友である公爵家子息のケルケイロは全くそんなことはないが、やはり彼は貴族の中では特殊なのだろう。

もともとかなりの努力家と思おぼしき貴族たちですら、俺に成績で敵たかうことはなかった。

これは俺が二度目の生を生きていることと、努力の質が根本的に違うことからして、ある意味で当然である。

俺は前世のように死にたくないし、また人類も滅ぼしたくないから必死で学んだが、貴族である

彼らにそこまでの覚悟はない、ということだ。

つまり俺は一種のズルのようなものをしているに等しいので、彼らの反感を買うのもある意味仕方ないと思っっている。スタート地点てんてんがそもそも違うのだ。

とはいえ、この場において俺の指示を聞いてくれないのは問題だった。

いや、指示を聞かないことではない。まともに戦えていないことが問題なのだ。

けれど、俺がいくらそれを説明したところで、彼らは理解しようとしなйдらう。

頭が悪いわけでも、状況を見られないわけでもないのだが、俺が相手となると、急に視野が狭くなるってしまうのである。

だからといって、指示を出さないわけにはいかない。何もしなければ、そこから陣形が崩れてしまふのだ。

「この班は下がり過ぎです！ もう少し前へ！」

「……ジョン！ 自分の持ち場に戻れ！ お前の班はあっちだろうが！ 俺たちに指図するな！」

貴族たちの班に指示を出しても、こんな風に拒否されてしまう。

本当に困った。心の底から。

どうしたものかと考えあぐねていると、横合いから声が聞こえてきた。

「その貴方あなた！ ジョンの言うことをお聞きなさい！」

声のした方に振り返ってみると、別の班の少女のものだった。少し離れた位置で戦っていたはず